

敦賀まちづくり

神楽通りの参道化で
新たな賑わいづくり

歩道を拡幅、買い物や
散策が楽しめる通りへ

今年3月、市道2号線、通称「神楽通り」の道路空間再整備が完了し、新たな賑わい創出空間へと生まれ変わりました。

氣比神宮の門前に位置する神楽通りは古くから商店街として栄えてきた歴史がありますが、近年の車社会に伴う、商店街の周遊性低下という課題を抱えていました。それを解消するため、今回の再整備では、歩行者、来訪者数を増やすための新たな施策として歩道拡幅工事を実施しました。4車線の車道を2車線にし、替わりに歩道の幅を広げ、買い物や散策が楽しめる門前町として参道化した魅力ある空間づくりを狙っています。



「2024年3月の北陸新幹線開業をきっかけに、観光客の方々に神楽通り界隈で長く滞在して楽しんでもらいたいという気運が高まり、参道化への動きが具体化しました」と話すのは、神楽町一丁目商店街で7代続く和菓子店を営む西島由佳里さん。行政と地元商店街が連携し、神社参拝ルートとして観光客も回遊できる歩行者空間とすることで、商店街全体の景観づくりや賑わい創出を目指します。

参道のシンボルとして
クリアランス金属の行燈を

参道化の一環として行ったのが、行燈の設置です。夜間の照明としてはもちろん、昼間はオブジェとして景観に溶け込むデザインで、参道化のシンボリック存在となっています。この行燈に用いられているのが、新型転換炉原型炉ふげんの廃止措置に伴って発生したクリアランス金属です。

「市民グループの勉強会でクリアランス金属のを知り、神楽通りの再整備で活用できたらいいんじゃないかと思いました」と話すのは、商店街で3代続く茶屋を営む中道尚子さん。「敦賀が原子

力と歩んできた歴史を自然な“気づき”として知ってもらえたら」という思いを込めた行燈は、クリアランス金属の重厚感を活かし、経年変化も味わいとなるデザインに。柔らかな灯が通りを照らし、街の歴史も伝えていきます。

●クリアランス制度：放射性廃棄物のうち、放射能濃度が低く、人体への影響がほとんどないものについて、国の許可確認を受けて、一般の産業廃棄物と同様に再利用または処分できる制度。
●クリアランス金属：クリアランス制度において国の確認を受けることにより、一般の有価物としてリサイクルし資源の有効利用を図ることができるもの。



クリアランス金属を用いた行燈を表示したプレート



●この記事に関するお問い合わせ
神楽町一丁目商店街振興組合
理事長 中山喜美子さん
090-18003-8239

暮らしに新しい何かを

福井県政策企画コーディネーター 原田周子さん

氣比神宮前の商店街は、参道としての役割を担いながら、敦賀駅から金ヶ崎エリアへと続く動線の中に位置する重要な拠点です。駅からの誘客を受け止め、まちへとつなぐ“結節点”としての可能性を秘めています。

この商店街は、代々この地で暮らししてきた人々の日常の場であると同時に、参拝や観光客も訪れる特別な場所です。だからここには、参道にふさわしい和の要素を活かした意匠と、子どもや高齢者、家族が憩える空間、さらに観光客と市民が自然に交流できる場が重なり合う、ここにしかない商店街の姿が求められます。その実現に向けて、歩道をゆとりある空間へと整え、人々がゆつたりと行き交い、ときに立ち止まり、語り、なごむことのできる環境を創出。さらに、既存のアーケードを活かしなが

ら、天井に木目の意匠を丁寧と重ねることで、和の趣と現代性が調和する美しい景観を構想しました。これから新たに店舗を構える人々とも手を取り合い、この参道全体をさらに魅力あふれる場所へと育てていけるでしょう。

商いと暮らし、歴史と未来が重なり合う場所へと。そこに加わる「あかり」。

クリアランス素材を用いた行燈は、役目を終えた素材に新たな光を宿す存在です。それは余剰や在庫ではなく、未来を照らす素材として再生されたもの。やわらかな光が人々の暮らしに寄り添い、商店街に新たな景色を生み出します。この行燈は、ものの循環と可能性を象徴する「あかり」。この地にふさわしいかたちで、暮らしの中に新しい希望の灯をともします。